

2016年11月19日(土) 月刊ケア12月号 掲載

ビューポイント『腫瘍内科医の役割』

腫瘍内科 笹木 有佑 科長 兼 外来化学療法センター長

最も効果が高く、最も副作用が少ない がん治療を目指す腫瘍内科医の役割

函館中央病院 笹木有佑腫瘍内科科長

超高齢社会が加速する中、今後ますますがん患者さんの増加が予測されている。そうした状況下、北海道がん診療連携指定病院として、がん診療に力を入れている函館中央病院（函館市）に、今年4月から腫瘍内科科長として笹木有佑医師が赴任した。腫瘍内科とは、がん患者さんに対し薬物療法を中心に専門的な治療を提供する診療科。笹木科長に腫瘍内科の考え方について紹介して頂いた。



笹木腫瘍内科科長

道南で唯一の 腫瘍内科を標榜

腫瘍内科とはその名称通り、がん治療に内科的に取り組む診療科。注目したいのは、肺がんや大腸がんなどと特定のがんに分類せず、「腫瘍」という言葉で一括りにしている点だ。

「がんの治療は消化器の医師なら大腸がん、呼吸器の医師なら肺がんなどと、臓器別の領域で取り組んでいるのが今の医療のあり方であり、縦割りの構造になっているといえます。腫瘍内科は臓器別に対応するのではなく、いずれのがんについても幅広い知識を持ちながら、主に抗がん剤を使った治療に取り組む診療科であり、がん

治療のニーズに対応すべく登場したといえます」（笹木科長）。

腫瘍内科は新しい診療科であるため、まだまだ医師数は少ないのが現状。道内全体でも腫瘍内科医は50人程度で、道南地区では笹木科長一人にとどまっている。笹木科長自身は2011年から5年間、国立がん研究センター中央病院（東京都中央区）に勤務し、研さんを積んできた。同病院は国内におけるがん征圧の中核拠点であり、がんの診療や研究、技術開発、治験や人材育成も行う医療機関として知られる。

函館中央病院において笹木科長は外来を受け持ちながら、外来化学療法センター長を兼務。抗がん剤の必要なケースでは各科の医師と連携し、看護師、薬剤師、リハビリ、栄養士など関連するスタッフとチームで患者さんの治療にあたっている。

笹木科長は日本消化器病学会専門医の資格を持ち、とくに胃・大

腸・肝臓・膵臓といった消化器がんの診断・治療を中心に取り組んでいるが、どこから発生したかわからないがんについても総合的に検査や診療を行える点も、腫瘍内科医としての役割の発揮のしどころとなっている。実際、診断のついていないがんの患者さんを紹介されるケースも多く、最近では整形外科から紹介された患者さんの骨転移がどこから転移してきたのかを発見したばかりという。

複雑化する抗がん剤治療で 専門性を発揮

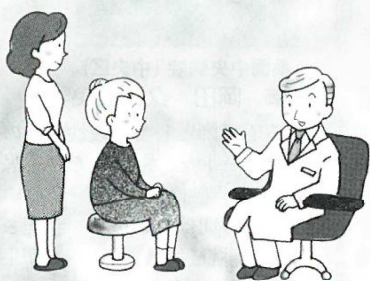
腫瘍内科医の役割の中心となるのが抗がん剤治療だ。抗がん剤はここ数年の進歩が目覚ましく、同時に抗がん剤治療に伴う副作用の薬も大きく進歩している。

「例えば15年ほど前であれば、大腸がんに使える抗がん剤は2種類くらいしかなかったのですが、現在は11種類あります。同様に胃がんも2種類から現在は10種類使うことができます。しかも、抗がん剤は1種類を選んで使うとは限らず、例えば11種類の中から3種類を組み合わせて、順番を変えて使うといった治療法もあり、がんによっては40通り程の治療法が

検討できることもあるのです。

それぞれの治療法にはエビデンス（根拠）があり、その中には高い効果が期待できるエビデンスと、それほど高くないエビデンスなど、さまざまなランク付けも存在します。それぞれの治療法にはそれぞれの副作用が考えられるので、すべてに対応するには専門性の高さが要求されます。こうした複雑な治療法に習熟しつつ、最も効果が高く、最も副作用の少ない治療を提供することが、腫瘍内科医として最もやりがいのある点だと思います」。

かつては海外で開発された抗がん剤が日本で承認されるには時間を要したが、現在は1年～1年半程度で承認されることも多く、日本の抗がん剤治療は世界の第一線に並ぶ状況にあるという。とりわ



地域の患者さんの不安や疑問にも対応

け近年普及しているのが分子標的薬だが、同薬はがん細胞の持つ特異的な性質を分子レベルでとらえ、それを標的として作用するようにつくられた薬。高い効果が期待できる一方で、重い副作用や従来の抗がん剤では考えられなかった副作用が報告されているという。「吐き気や食欲がなくなるなどといった典型的な副作用だけではなく、最近の抗がん剤の副作用では、高血圧症や尿タンパクがみられたり、糖尿病の発症、甲状腺機能の低下、さらには腸に穴が開くなど、これまででは考えられない副作用が報告されています。分子標的薬は今後も普及が進むので、それだけ副作用も多様化する可能性があります。患者さんに安全な医療を提供するためにも、腫瘍内科医は専門家として薬剤や副作用について学習を続ける必要があります」。

このほか、笹木科長は院内のスタッフへの学習会を開催するなど、教育的活動も行い、腫瘍内科としての重要な役割としている。また、セカンドオピニオンにも応じ、地域の患者さんの不安や疑問にも対応。地域を見据えながら活動している、腫瘍内科としての取り組みが注目される。